

令和2(2020)年度県立高等学校入学者選抜の結果について

令和2年度県立高等学校入学者選抜は、全日制課程の特色選抜が2月6日木曜日及び同月7日金曜日、一般選抜が3月5日木曜日、また、定時制課程のフレックス特別選抜が3月5日木曜日、一般選抜が3月17日火曜日に実施された。これらの受検・合格状況は下の表に示したとおりである。

1 生徒募集定員の総枠について

令和2(2020)年3月の県内中学校卒業見込者数(前年比530人減)を考慮し、全日制課程の定員を11,675人(前年比360人減)とした。

2 令和2(2020)年度入学者選抜について

(1) 特色選抜

特色選抜については、全ての全日制課程高校59校116系・科で実施された。特色選抜においては全ての高校で面接を実施しており、37校86系・科では作文を、18校26科では小論文を実施した。また、学校独自検査は6校6科で実施しており、同じ6校6科で学校作成問題を実施した。

(2) 傾斜配点、面接等

昭和61年度から一般選抜(学力検査)の評価方法の弾力化を図り、教科内傾斜配点を実施している。実施については、各学校・学科の特色及び入学後の生徒の進路等を配慮して決めるものであり、今年度は3校3科で国数英の3教科により実施した。また、小山高校の数理科学科については、昨年度と同様に、数学の得点を1.5倍にする教科間の傾斜配点を実施した。

一般選抜(学力検査)受検者に対する面接は平成元年度から導入しており、今年度は23校73科で実施した。

海外帰国者・外国人等の受検に関する特別の措置については、特色選抜と同時に行うA海外特別選抜で30名が合格した。

定時制課程においては、満20歳以上の志願者は、学力検査を行わず、作文をもってこれに代えることができる。この制度では、2名が合格した。

以下、各教科の学力検査問題(全日制)について、出題の方針及び結果の概要について述べる。なお、各問の正答率は全日制課程受検者1,000名を抽出して調査した結果であり、完全正答者についての割合である。

<表> 受検・合格状況の推移

	令和2(2020)年度				平成31(2019)年度				平成30(2018)年度			
	全日制		定時制		全日制		定時制		全日制		定時制	
	特色選抜	一般選抜	フレックス特別	一般選抜	特色選抜	一般選抜	フレックス特別	一般選抜	特色選抜	一般選抜	フレックス特別	一般選抜
募集定員	11,675		560		12,035		600		12,195		640	
受検人員	5,064	9,242	201	231	5,215	9,973	198	253	5,473	10,205	148	232
受検倍率	1.80	1.13	2.01	0.51	1.81	1.18	1.98	0.51	1.88	1.19	1.23	0.44
合格人員	3,215	7,894	110	217	3,286	8,325	110	214	3,323	8,388	111	230
合格倍率	1.57	1.17	1.83	1.06	1.59	1.20	1.80	1.18	1.65	1.22	1.33	1.01

※ 受検倍率=受検人員÷定員、合格倍率=合格人員÷合格人員

出題の方針

- 1 中学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、中学校国語科の指導内容に即し、基本的な言語に関する知識・理解、適切に表現する能力、正確に理解する能力を総合的に評価できるようにした。
- 2 生徒の多様な学力の実態に応じ、言語に関する事項についての知識及び理解の程度を評価できるようにした。
- 3 生徒の学習や日常生活に関連があり、内容に偏りのない平易な文章を読んで、表現者の立場や考え方を捉えたり、あるいは作品の描写や登場人物の心情を読み取ったりするなどして自分の考えをまとめて表現する能力を評価できるようにした。
- 4 古典については、親しみやすい内容の古典を素材に、基本的な読む能力を評価できるようにした。
- 5 作文については、自分の意見の根拠を明確にして適切に書く能力を評価できるようにした。

結果の概要

1 は、言語に関する知識と理解度、言語感覚の確かさや言語運用能力をみるものである。言語に関する単なる知識の確認にとどまらず、言葉の意味やきまりを確認する機会を通して、言語生活の向上に役立てることを意図して出題した。

1 の漢字の読みの問題は平均正答率が 85.3%、2 の漢字の書きの問題は平均正答率が 79.2%であった。漢字の読みでは、(1)から(4)はよく読めていたが、(5)の「赴く」の読みが 58.0%とやや低かった。漢字の書きでは(3)「似た」が 93.2%で最も正答率が高く、最も正答率の低い(5)「講座」が 68.3%という結果であった。日常生活で使用する語彙の確実な定着を今後も期待したい。

3 の慣用句に関する設問の正答率は 98.4%、熟語の構成に関する設問の正答率は 55.5%であった。熟語の構成については学習を継続し、定着させることが望まれる。

2 は、江戸時代に出版された「長崎夜話草」を素材として出題した。主人公が、道ばたで拾った銀貨の持ち主を探し歩き、落とし主に渡す場面を取り上げた。歴史的仮名遣いや動作の主体を答える問題、主人公の人物像などを問う問題を出題した。

1 の歴史的仮名遣いにおいては、正答率が 94.9%とよく読めていた。一方、4 の内容に関する設問においては、部分正答を含む正答率は 49.7%であった。

主語を補いながら読み進める古文の学習の特徴を念頭に、行為や動作の主体をおさえ、話の流れを概括する学習や、登場人物の言動の内容や意味を捉え

る学習等の継続が重要である。また、言語文化を継承するという観点からも、古文特有の言葉に注目したり、話の面白さを味わったりするなど、多くの古典に親しむ機会をもち、現代に息づく古典の価値を理解することが大切である。

3 は、細川英雄の「対話をデザインする」を素材として出題した。自己と他者とのやりとりの中で本当の自分を探していく過程について論じた文章である。

自分の言葉で答えを記述する 5 の部分正答を含む正答率は 49.5%であった。記述問題においては、本文の語句を適切に用いて説明する力を身に付けるとともに、書くことに対する前向きな姿勢が必要となる。

説明的な文章を読解する上では、筆者が本文全体を通して伝えようとしていることを正確に読み取る力を養っていく必要がある。その際には、読み取った内容を自分の言葉でまとめたり、論理の展開について考えたりする学習を取り入れることも効果的である。

4 は、岡崎琢磨の「進水の日」を素材として出題した。主人公の少年「航輝」の、家族のために船を下りようとしている父親への思いを描いた場面を取り上げた。

3 の父親の性格を問う問題の正答率が 53.5%とやや低かった。文脈に即しながら適する答えを見つける力を身に付けることが求められる。

文学的な文章では、グループ活動等において、各自の読みの交流を図ることも大切であるが、解釈の妥当性を検証し合うような学習が重要である。判断の根拠を探して話し合ったり、表現や描写をもとに登場人物の言動の意味を考えさせたりする学習活動によって、確かな読みの育成につなげていきたい。

5 の作文は、図を参考にして、「コミュニケーションをとる際に心がけたいこと」について、条件に沿って内容を適切に書く能力を評価するものである。

図から読み取った内容と、テーマに対する適切な具体例、自分の考えと理由を関連づけて適切に表現することを求めている。普段の生活の中で、身の回りの出来事に対する意識を高め、考える習慣を身に付けるとともに、読み手の立場に立って自分の意見を表現できるようにしておきたい。

(全日制課程受検者から1,000名を抽出して集計)

問 題		正答率	問 題		正答率	問 題		正答率	
1	1	(1)	97.7%	2	1	94.9%	4	1	96.1%
		(2)	90.9%		2	80.5%		2	10.1% (70.8%)
		(3)	87.9%		3	82.7%		3	53.5%
		(4)	92.0%		4	11.5% (49.7%)		4	79.8%
		(5)	58.0%		5	62.3%		5	3.1% (39.4%)
	2	(1)	84.0%	3	1	88.5%		5	6
		(2)	68.8%		2	47.6%	5		(95.5%)
		(3)	93.2%		3	72.0%			
		(4)	81.6%		4	93.7%			
		(5)	68.3%		5	7.0% (49.5%)			
	3	(1)	86.8%		6	71.0%			
		(2)	98.4%						
		(3)	55.5%						
		(4)	66.8%						
		(5)	93.4%						

※ () 内は部分正答も含めた割合

社 会

出題の方針

- 1 中学校学習指導要領の趣旨を踏まえて、地理・歴史・公民の各分野から相互の関連にも留意してバランスよく出題した。
- 2 社会科のまとめとして [7] を出題し、各分野の学習成果を活用する力をみるようにした。
- 3 各分野において基礎的・基本的内容を出題し、社会的事象に関する基礎的知識についての理解の程度をみるようにした。
- 4 地図・統計・略年表等から必要な情報を読み取り、適切に表現する力をみるようにした。
- 5 各分野において論述問題を出題し、社会的事象を多面的・多角的に考察し、適切に表現する力をみるようにした。

出題分野・解答形式別の問題数・配点の内訳

	地理的分野	歴史的分野	公民的分野	総合	合計
選 択	6(12)	6(12)	8(16)	3(6)	23(46)
記 述	5(10)	6(12)	3(6)	1(2)	15(30)
論 述	2(8)	2(8)	1(4)	1(4)	6(24)
合 計	13(30)	14(32)	12(26)	5(12)	44(100)

() 内の数字は配点

結果の概要

[1] は、地理的分野のうち、「日本の様々な地域」に関する理解の程度をみる問題である。また、多様な資料を活用することにより、中国・四国地方の地域的特色を考察する力をみるようにした。

4 は、地域の課題や地域おこしの取り組みについて、複数の資料からその特徴等を読み取り、適切に表現する力をみる問題で、正答率は 32.7%であった。

[2] は、地理的分野のうち、「世界の様々な地域」に関する理解の程度をみる問題である。東アジア、ヨーロッパ、北アメリカなどを取り上げた。資料をもとに、自然環境や社会環境などに着目して、各地域の人々の生活や文化をとらえ考察する力をみるようにした。

6 は、複数の資料を活用して、日本・中国と比較しながら、アメリカ合衆国の農業の特色について適切に表現する力をみる問題で、正答率は 7.9%であった。

地理的分野では、資料を活用して地理的事象を自分の解釈を加え説明・論述したり、意見交換したりする学習活動を充実させ、思考力や表現力等の育成を図っていくことが、今後も求められている。

[3] は、歴史的分野のうち、日本の古代から近代までの理解の程度をみる問題である。各時代の史料からなる六つのカードをもとに、日本と世界の国・地域

との関係における歴史的事象の理解度をみるようにした。

7 は、大日本帝国憲法の制定における、日本とドイツの関わりについて、資料から読み取ったことと授業で学んだ内容とを結びつけ、文章にまとめ表現する力をみるもので、正答率は 14.0%であった。8 は、カードに示された歴史的事象から、時代の特徴を読み取り、古代から近代に至る歴史の大きな流れをとらえ考察する力をみるもので、正答率は 66.6%であった。

[4] は、歴史的分野のうち、日本の近代から現代にかけての理解の程度をみる問題である。

6 は、高度経済成長期の日本において、産業の発展にともない公害などが社会問題となっていたことについて、資料から読み取ったことと授業で学んだ内容とを結びつけ、文章にまとめ表現する力をみるもので、正答率は 50.3%であった。

歴史的分野では、学んだ知識を活用してその時代を大観し説明する活動や、各時代における変革の特色を考察し時代の転換の様子をとらえる活動などを通して、歴史的事象について考察・判断したことを自分の言葉で表現する学習の充実が、今後も求められている。

[5] は、公民的分野のうち、主に「私たちと現代社会」及び「私たちと政治」に関する内容の理解の程度をみる問題である。1 は、現代社会をとらえる見方や考え方の一つである「効率」についての理解度をみるもので、正答率は 90.2%であった。

[6] は、公民的分野のうち、主に「私たちと経済」に関する内容の理解の程度をみる問題である。

3 は、身近な事例を取り上げ、課題の解決方法を具体的に表現させることにより、循環型社会の実現を目指す取り組みについて、基礎となる考え方の理解度をみるもので、正答率は 82.0%であった。6 は、日常生活から現代社会の課題を見だし、複数の資料から課題解決の方向性を読み取って、適切に表現する力をみるもので、正答率は 24.6%であった。

公民的分野では、学んだ知識・概念や技能を活用して、社会的事象について、自分の考えをまとめ説明や論述をしたり、意見交換や議論をしたりして、自分の考えをより深める学習活動が、今後も求められている。

[7] では、日本の国際協力を取り上げ、地理・歴史・公民の各分野で学習した内容を踏まえて、資料を読み取り、適切に表現する力をみる問題である。

5 は、課題探究によって導き出した解決策について、資料に基づき説明する力をみるもので、正答率は、**I** - 20.4%、**II** - 17.7%であった。

社会科の授業では、学んだ知識や概念を活用し、複数の資料をもとに、社会的事象の意味や意義を解釈したり、事象の特色や事象間の関連を説明したりする学習活動が、今後もさらに求められている。

(全日制課程受検者から1,000名を抽出して集計)

問 題		正答率
1	1	(1) 75.7%
		(2) 83.3%
		(3) 69.3%
	2	54.5%
	3	(1) 49.4%
		(2) 60.4%
4	32.7% (94.4%)	
2	1	49.0%
	2	71.4%
	3	36.4%
	4	50.1%
	5	47.3%
	6	7.9% (85.6%)
3	1	74.8%
	2	47.7%
	3	69.3%
	4	49.4%

問 題		正答率
3	5	65.6%
	6	49.7%
	7	14.0% (39.9%)
	8	66.6%
4	1	37.1%
	2	72.6%
	3	15.4%
	4	67.1%
	5	79.5%
	6	50.3% (81.7%)
5	1	90.2%
	2	(1) 65.0%
		(2) 64.0%
	3	81.6%
	4	(1) 56.1%
(2) 38.4%		

問 題		正答率	
6	1	80.9%	
	2	88.8%	
	3	82.0%	
	4	25.6%	
	5	41.1%	
	6	24.6% (80.7%)	
7	1	82.7%	
	2	73.9%	
	3	68.8%	
	4	73.5%	
	5	I	20.4% (24.5%)
		II	17.7% (47.9%)

※ () 内は部分正答も含めた割合

数 学

出題の方針

- 1 中学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、中学校数学科の指導内容に即し、数学の基礎的・基本的な知識・技能及び数学的な思考力、判断力、表現力を総合的に評価できるよう、数と式、図形、関数、資料の活用の4領域から出題した。
- 2 数と式の領域では、数の四則計算や文字式、方程式の問題をとおして、数学全般に関わる基礎的な技能の習得状況を評価し、また、問題解決のための思考の過程を記述させることにより、基礎的・基本的な知識・技能、数学的な思考力、判断力、表現力等を評価できるようにした。
- 3 図形の領域では、図形の計量問題や基本的性質に関する問題及び証明問題を通して、基礎的な概念や性質を用いて論理的に考察し表現する能力を評価できるようにした。
- 4 関数の領域では、関数の基礎的・基本的な問題を通して、関数的な見方や考え方を評価できるようにした。
- 5 資料の活用の領域では、資料の分析や確率に関する基礎的・基本的な問題を通して、統計的な見方や考え方や確率的な見方や考え方を評価できるようにした。
- 6 数と式、図形、関数、資料の活用のうち、いくつかの領域からなる融合問題を通して、事象の中に潜む関係や法則を数理的に考察し、数学的な思考力、判断力、表現力等を用いて、問題を解決する能力を評価できるようにした。

結果の概要

1 は、各領域における基礎的・基本的な知識及び技能をみる問題であり、平均正答率は81.9%であった(昨年度は76.1%)。今後も基礎・基本の定着を図ってほしい。ただし、2つの数量関係を等式で表す数学において基礎的かつ重要な技能を問う問題として出題した「7 等式の立式」に課題がみられた。確実な定着が望まれる。

2 は、3領域(図形、数と式、関数)における知識及び技能をみる問題である。1は作図、2は文字式を用いた証明、3は2乗に比例する関数に関する問題であり、正答率は1が62.4%、2が71.5%、3が32.1%であった。1は、与えられた条件を図形の性質と結び付け、作図できるかを問う問題である。3は、関数の座標から比例式を立式し、正しく処理する力を問う問題である。ここで問われる1つ1つの内容はいずれも基本的な内容である。基本的な考察を積み重ねて思考する力の定着が望まれる。

3 は、思考過程等を論述させることをとおして数学的に考察し表現する能力を問う問題である。1は、人数の増減をもとに考察する連立方程式の問題であり、正答率は47.5(79.8)%(()内は部分正答も含めた割合)であった。2は、8月の気温をまとめた度数分布表に関する問題である。(3)は、2つの度数分布表を用いて、ある事柄が正しいことを説明する問題である。正答率は、(1)が25.0%、(2)が66.0%、(3)が31.2(42.9)%であった。簡潔、明瞭、的確に表現する力を定着させるため、普段の授業において、互いに考えを表現し合う活動の充実が望まれる。

4 は、図形の領域における思考力、判断力、表現力を問う問題である。1は、平行四辺形の性質をもとに、2つの三角形の合同を証明するために必要ことは何かを明確にして、根拠を明らかにしながら論理的に考察する力を問う問題である。正答率は24.5(63.4)%であった。2の(1)は、三平方の定理を活用して正三角形の面積を求める問題であり、(2)は、空間図形にある三角形について、三平方の定理を活用して求めた三角形の3辺の長さから、その三角形が直角三角形であることに気が付けるか(三平方の定理の逆)を問う問題である。正答率は(1)が52.0%、(2)が10.1%であった。問題場面を的確に捉え、中学校で学んだ図形の学習内容と結びつけ、考察の方法を自ら選択し、問題解決を図るような学習活動の充実が望まれる。

5 は、速さと距離についての考察を通して、関数領域における思考力、判断力、表現力をみる問題である。1は、一次関数の変化の割合の問題であり、正答率は72.2%であった。2は2人の距離の差を求める問題であり、正答率は36.6%であった。3は一次関数の式を求める問題、4はパンクした時間を求める問題である。いずれも、問題文、会話文、グラフなどから、速度やある地点を通過した時間を正しく読み取る必要がある。正答率は3が34.2%、4が11.2%であった。グラフを活用し考察できるかが正答への鍵である。普段から、言葉、数、式、図、表、グラフ等を関連づけて考察する学習場面の充実が望まれる。

6 は、同心円状に描かれた図形に関する問題をとおして、複数の領域における思考力、判断力、表現力を問う問題であり、正答率は、1が73.5%、2が77.0%、3が19.9(32.0)%、4が1.1(3.8)%であった。普段の学習から場面を的確に捉え、試行錯誤しながら粘り強く問題解決に取り組むことを心掛けてほしい。

(全日制課程受検者から1,000名を抽出して集計)

問 題		正答率	問 題		正答率	問 題		正答率
1	1	98.3%	2	1	62.4%	6	1	73.5%
	2	92.7%		2	71.5% (85.3%)		2	77.0%
	3	76.4%		3	32.1%		3	19.9% (32.0%)
	4	79.7%	1	47.5% (79.8%)	4		1.1% (3.8%)	
	5	93.0%	3	2	(1)	25.0%		
	6	81.0%			(2)	66.0%		
	7	74.1%			(3)	31.2% (42.9%)		
	8	84.5%	4	1	24.5% (63.4%)			
	9	64.1%		2	(1)	52.0%		
	10	72.4%	(2)		10.1%			
	11	82.4%	5	1	72.2%			
	12	83.2%		2	36.6%			
	13	74.7%		3	34.2% (52.7%)			
	14	90.1%		4	11.2%			

※ () 内は部分正答も含めた割合

出題の方針

- 1 中学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、中学校理科の指導内容に即し、物理的領域、化学的領域、生物的領域、地学的領域の4領域の学習内容から偏りなく出題した。
- 2 身近な現象や日常生活と関わりの深い内容を取り入れ、自然の事物・現象についての関心と理解、基礎的・基本的な知識をみるようにした。
- 3 観察・実験についての基礎的な知識・技能をみるようにした。
- 4 観察・実験を通して、自然の事物・現象を科学的に調べ、論理的に思考する力をみるようにした。
- 5 自然の事物・現象を科学的に調べた結果を、的確に表現する力をみるようにした。

結果の概要

1 は、小問集合であり、幅広い分野からの出題である。自然の事物・現象、観察・実験に関する基礎的な知識・理解及び関心をみるようにした。選択問題の正答率の平均が 55.5%、記述問題で 78.6%であった。正答率の高かった問題は、DNAの 87.0%、マグニチュードの 85.4%で、いずれも記述問題であった。一方、選択問題の混合物について、塩化ナトリウムを選択した誤答の割合が高く、正答率は 40.7%と低かった。

2 は、モデル実験をもとに、天球上で金星や星座がどのように見えるかを考察する力をみる問題である。また、「半年後を想定した位置」を考える問題は、時間的概念や空間概念が形成され、かつ、天体の位置関係や運動について相対的にとらえる力が求められる。3 の天体の運動は、正答率は 20.3%と低かった。

3 は、定量的な実験によって、LED電球を点灯させたときに生じる熱エネルギーが、白熱電球より小さいことを証明し、消費電力のデータと併せてLED電球のエネルギーの変換効率を考察する力をみる問題である。3 の実験結果を解釈し記述する問いは、正答率が 37.4%であった。

4 は、身近な植物の観察を通して、植物の体のつくりと働き、植物の生活と種類について考察する力をみる問題である。学習により得た植物の分類の知識と、観察の結果とを結びつけて考察する力を身につける必要がある。すべての設問で正答率が 50%を超え、学習による知識の定着が図られていた。

5 は、中和や金属と酸の反応、酸化反応などの観察・実験の結果を整理し解釈する力をみる問題である。また、実験の技能として、誤差の扱いや測定値の処理の方法を正しく習得しているかグラフの表現からみた。実験で得られる様々な結果から必要なデータを結びつけていく分析力を身につける必要がある。正答率は、2 の化学反応式の 47.7%を除き、いずれの問いも低調であった。

6 は、血液循環の模式図をもとに、器官どうしのはたらきを関連づけて考える総合的な力をみる問題である。体のつくりについては、実験を行うことができない分野であるが、既存の知識を活用し、考察したことを表現できる力を身につけてほしい。2 の肝臓や小腸の働きについて記述する問いは、正答率 21.0%と低かった。

7 は、密度に関する基本的な知識を活用し、実験の組み立てや結果の予想を問うことで、科学的な思考力や表現力をみる問題である。実験によって何が分かるのか理解することは、仮説の検証方法を考える力につながり大切なことである。2 の体積や質量と密度との関係についての問いは、正答率が 38.8%と低く、密度の概念が身につけていない受検生が多かった。

8 は、乾湿計やグラフを読み取り、気温による飽和水蒸気量の変化と湿度の変化、露点について考察する力をみる問題である。気温、飽和水蒸気量、湿度、露点の基礎的な知識をつけ、実験結果を分析する力を身につける必要がある。正答率は、1 の乾湿計を読み取る問いが 55.3%、3 のグラフから湿度を判断する問いが 70.7%であり、概ね学習による知識の定着が図られていた。

9 は、浮力の性質を、物体にはたらく力に着目して考察する力をみる問題である。浮力の大きさが、水面から沈んだ部分の体積によることを、実験の結果から思考できるかがカギとなった。4 の実験結果の考察は、中学生に多くある誤概念についての問いであり、特に④の正答率は 22.1%と低かった。

理科の学習は、用語を覚えることはもちろんであるが、実験・観察で得られた結果について、計算をしたり、グラフを書いて、仮説を検証したりすることが大切である。また、考察したことを自分の言葉で表現する学習も重ねてほしい。

(全日制課程受検者から1,000名を抽出して集計)

問 題		正 答 率	問 題		正 答 率	問 題		正 答 率		
1	1	40.7%	4	2	68.8%	8	2	26.3% (26.4%)		
	2	76.9%		3	①		52.2% (62.1%)	3	70.7%	
	3	56.0%			②		58.5% (59.6%)	4	43.9% (61.1%)	
	4	48.4%		4	75.3% (88.0%)		1	26.3% (26.3%)		
	5	77.1% (77.9%)	5	1	19.3% (19.3%)	2	37.8% (38.4%)			
	6	85.4% (85.7%)		2	47.7% (56.6%)	3	重力	38.7% (42.2%)		
	7	87.0% (87.0%)		3	20.2% (24.2%)		糸が引く力	17.4% (18.4%)		
	8	65.0% (65.0%)		4	5.0% (5.0%)	9	①	40.7%		
2	1	87.6% (87.7%)	6	1	42.5%		②	32.5%		
	2	58.7% (58.8%)		2	21.0% (50.2%)		③	72.3%		
	3	20.3%		3	33.8% (33.8%)		④	22.1%		
3	1	71.3% (71.4%)	7	1	67.0% (67.5%)	4	2	38.8%		
	2	電力量		49.9% (50.4%)	2		38.8%	3	液体	54.1%
		使用時間		43.3% (43.5%)	3		実験結果		42.7% (50.4%)	
	3	37.4% (49.7%)		8			1	55.3% (56.1%)		
4	1	87.6% (91.5%)								

※ () 内は部分正答も含めた割合

英 語

出題の方針

- 1 問題の内容が中学校学習指導要領の趣旨に沿うものとし、聞く、話す、読む、書くことの言語活動の4領域にわたって出題するように努めた。
- 2 中学校学習指導要領に示されている基礎的・基本的な内容について、多く出題するようにした。
- 3 聞く力については、まとまりのある英語を聞いて概要や要点を適切に聞き取る、基礎的な力を主にみるようにした。
- 4 表現する力については、与えられた場面やテーマに沿って英語で正しく伝える力をみるようにした。
- 5 読む力については、比較的長い文を読み、書かれていることの概要や要点を文脈に沿って読み取る力をみるようにした。

結果の概要

1 は、身近な事柄を素材にして、音声によるコミュニケーションの場面を扱った聞き方の問題で、3問構成とした。問題全体の平均正答率は、63.6%であった。**1** は短い対話を聞いて適切に応答する力をみる問題である。3問の平均正答率は83.1%であった。**2** は対話を聞いて、内容を理解する力をみる問題であり、小問ごとに設問2つに答える形式である。正答率の平均は61.2%であり、各小問の平均正答率は(1)が56.2%、(2)が66.2%であった。**3** はまとまった長さの英文を聞いて、その要点を捉え、英語で答える力をみる問題である。4問の平均正答率は51.5%であった。コミュニケーション能力を育成するためには、英語を聞いて必要とされる情報を正確に把握することのできる「聞く力」を育成することが大切である。

2 は、基礎的・基本的な言語材料についての理解度をみる問題である。**1** は基礎的・基本的な言語材料を活用した自分の好きな教科と将来の夢についての英文を素材にしている。6問の平均正答率は70.5%であった。**2** は語句を並べかえ、語と語のつながりなどに注意して正しく英語で表現する力をみるための問題である。3問の平均正答率は57.4%であった。

3 は、対話の流れを把握しながら要点を捉える力、対話や与えられた資料等に基づき英文を完成させる力、及びテーマに沿って英語で自分の意見や考え等を正しく伝える力をみる問題である。言語の実際の使用場面により近い題材

及び問題設定となるようにしている。異文化理解をテーマとし、日本の「学校清掃」とフランスの「教科書貸与」を扱った対話文を出題した。問題全体の平均正答率は29.4%で、中間点含めると53.6%であった。**2** の対話の流れを把握しながら、適切な英語を書く問題は、9.6%で、中間点を含めると16.7%であった。**4** は資料や絵をヒントに文脈から判断して、適切な英語で表現する力をみる問題であった。正答率の平均は17.8%であり、中間点を含めると51.3%であった。場面や状況を的確に把握し、適切な表現を活用して書くことが求められる。**6** は本文を読み、対話の流れを把握しながら要点を捉え、適切な日本語でまとめる問題であり、正答率は9.2%であったが、中間点を含めると33.9%であった。**7** はテーマについて英語で表現する力をみる問題であり、「日本の学校行事」について、具体例を挙げてつながりのある英文で説明する問題とした。完全正答率は1.3%であったが、中間点を含めると72.5%であった。自分の気持ちや考えを相手に伝えるように英語で書く力を育成するためには、言語材料についての理解の定着を確実に図ることと、実際のコミュニケーションの場面を想定しながら、日頃から英語で表現しようとする取り組みを積み重ねることが重要である。

4 は、物語文を素材として用いる読解問題で、物語文の内容を文脈に沿って読み取る力をみるものである。今年度は、ボランティアクラブでリーダーになった主人公の心が成長する様子を題材とした。4問の平均正答率は44.9%であった。**3** は、本文中の要点を把握し、登場人物の心情の変化を捉える問題である。正答率は27.3%であり、中間点を含めると58.2%であった。

5 は、説明文を素材として用いる読解問題で、今年度はシールド工法についての説明文を出題した。4問の平均正答率は41.1%で、中間点を含めると47.2%であった。

英文を読み、その概要や要点を捉え、適切に日本語でまとめる力などを身に付けるためには、日常的に比較的長めでまとまりのある英文の読解に取り組むことが大切である。

(全日制課程全受検者から1,000名を抽出して集計)

問 題			正答率	問 題			正答率	問 題			正答率	
1	1	(1)	86.8%	2	1	(1)	75.7%	3	5	52.6%		
		(2)	66.4%			(2)	51.1%		6	9.2% (33.9%)		
		(3)	96.0%			(3)	81.0%		7	1.3% (72.5%)		
	2	(1)	①			59.0%	(4)	85.3%	4	1	74.5%	
			②			53.4%	(5)	64.9%		2	14.1% (18.8%)	
		(2)	①			50.2%	(6)	64.7%		3	①	33.2% (58.4%)
			②			82.1%	(1)	78.4%			②	21.4% (58.0%)
	3	(1)	81.0% (81.3%)			2	(2)	47.5%	4	63.0%		
		(2)	52.5% (59.2%)				(3)	46.4%	5	1	33.3%	
		(3)	19.4% (19.4%)				1	62.1% (76.0%)		2	27.4% (52.0%)	
		(4)	52.9% (54.2%)	2	9.6% (16.7%)	3	44.8%					
	3	4		3	76.3%	4				4	58.7%	
				(3)	19.4% (56.0%)							
				(4)	17.4% (54.8%)							
				(5)	16.7% (43.2%)							

※ () 内は部分正答も含めた割合